CSEAS

京都大学東南アジア研究センターニュース

NEWSLETTER

CENTER FOR SOUTHEAST ASIAN STUDIES, KYOTO UNIV.

（2000年11月17日～2001年４月30日）　No. 44

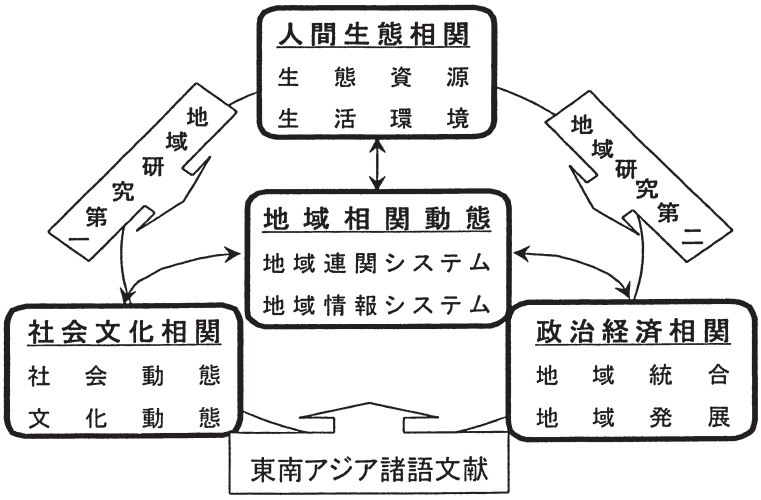
東南アジア研究センターの新たな出発

1965（昭和40）年に設立以来、東南アジア研究センター（以下センター）は、わが国の地域研究を先導する一研究機関として、大きな役割を果たしてきた。センターの歴史を振り返ると、主に地域情報の蓄積を行った「設立期」、主に自然科学と人文・社会科学の学際的共同研究を推進した「展開期」をへて、5部門14分野への改組以降現在までの総合的地域研究手法の確立を目指した「総合期」の3つの画期に大別することができる。

ところが現在、東南アジアの地域研究をめぐって激動が生じており、センターの的確で迅速な組織的対応が求められている。第1にグローバリゼーションの渦中に東南アジアが巻き込まれ、世界の政治経済の動向を無視しては十分に東南アジアが捉えられなくなってきた。そのため、学問分野の専門細分化の流れを押しとどめ、従来の総合的地域研究を超えた、地域間比較と俯瞰的・総合的研究を通じて、東南アジアの全体像を解明する必要性が急速に高まっていること、第2にインターネットの普及を中心として最近急激に進行している情報化・国際化の波は、東南アジアや欧米における東南アジア地域研究の隆興と相俟って、それに対する研究支援組織を含めたセンターの迅速で積極的な対応を迫っていること、が指摘できる。

第1の課題を克服するため、専門細分化しすぎたこれまでの研究組織の統合を推進するとともに、主として地域間比較の手法を用いて東南アジアの全体像の把握をめざす新たな研究部門ないし分野を設置する。すなわちこれまでの5部門14分野を「人間生態相関」「社会文化相関」「政治経済相関」の3研究部門に統合すると同時に、東南アジアの全体像の把握をめざす研究分野（「地域連関システム」）を含む新たな研究部門（「地域相関動態」）を設ける。また第2の課題を克服するため、この「地域相関動態」研究部門にもう1つの研究分野（「地域情報システム」）を設け、空間・画像情報や多言語情報の処理を担当せしめるとともに、資料部の強化、客員研究員の拡充、海外連絡事務所の機能強化を図る。

この新しい組織は2001（平成13）年4月1日よりスタートし、このことによってセンターは、地域研究という学問に新たな地平を開拓していくことが可能となるとともに、情報化・国際化という時代の流れに迅速かつ的確に対応し、アジアにおける「知の拠点」となる基盤をさらに充実させることになる。



その他の主な内容

北野康子図書室主任が停年退官 ……（2）
坪内良博AA研究科教授停年退官 ……（3）
COE国際会議開催・COEだより ……（4）
拠点大学セミナー ……（5）
人事 ……（6～7）
Colloquium ……（7～8）
海外調査だより ……（8）
研究会報告 ……（9）
東風南信 ……（10）
Visitors' Views ……（11～14）
教務掛主任前田満喜子さん
定年退職 ……（15）
連絡事務所だより ……（16）

北野康子図書室主任が停年退官

東南アジア研究センター資料部図書室主任北野康子先生は、2001（平成13）年3月末日をもって停年退職された。先生は、1977（昭和52）年9月に貿易研修センター情報資料室から初代図書室助手として着任されて以来、実に23年余の長きに亘りセンター図書室の発展のために尽力された。

ご着任当初は、規模の小さかった図書室も、現在では洋書・和漢書あわせて10万冊に上る東南アジア地域にかかわる専門書の他、膨大な数のマイクロフィルム、現地語資料等を所蔵する図書室に成長した。その成長を実務面で支えられたのが北野先生であり、選書、購入、カタロギングのあらゆる面で、普通の図書室が経験しないような数々の苦労を重ねてこられた。特に、1986（昭和61）年に東南アジア諸語文献部門が設置されてからは、東南アジアから招聘されたカタロガーを仕事上のみならず生活全般に亘ってきめ細かく行き届いた配慮で支えられ、現地語資料整理が円滑に行われるようその環境整備に心を砕かれた。

北野先生のご苦労に感謝し今後益々のご活躍を祈念して、

歓送会でセンター職員・旧職員とともに

記念品の電子辞書を手に破顔一笑。左は元外国人研究員のウタリさん

3月29日歓送会が開かれた。枝垂れ桜が綻びはじめた祇園新橋通「竹香」に、センター・AA 研究科の教職員のみならず、石井米雄元センター所長、高谷好一元センター教授をはじめ以前図書室に勤務された方々など多くの旧職員が集った。立本所長と石井先生からの労いとお祝いの言葉に続き、北野先生はハワイ大学大学院で図書館学を修められてから今日に至るまでの30年を振り返られた。席上、元外国人研究員からのカードが紹介された。これは小室静子さん等図書室職員のアイデアによるもので、タイ、インドネシア、アメリカなど在住の35人もの方から心のこもった手紙やカードが寄せられ、先生の誰に対しても誠実で懇切丁寧な生き様が改めて浮き彫りとなった。

ご退職後は、豊富な知識と堪能な英語力を生かしてボランティア活動をされるほかは悠々自適の生活を送られると聞いている。先生の第二の人生が輝かしいものとなりますように。

センターを去るにあたって

北野　康子

レンガ建てのセンターが、晩秋の夕日に包まれて黄金色に輝く時刻がある。河原で絵筆を動かす人もいる。建てられた当時は、さぞモダンな建物であったに違いない。歴史的建造物の中で仕事ができていいですね、と他の部局の人から言われたことがある。旧京都織物の事務室と倉庫の跡をなんとかうまく使えただろうか。そのうちに、階段から足を踏み外す人も出るかもしれないと危惧したが、今のところ無事である。外国には刑務所を図書館に改造した例がある。テレビドラマの撮影で刑務所になっても不思議ではない。大扉の下を出所するやくざや、藤田まことの演技を、入り口のドアや、二階のカーテンの隙間から覗いていて注意されたこともある。受刑者の草野球のグラウンドになった書庫の横で、亡くなられた土屋健治先生は、自分の著書『インドネシアの民族主義研究』をおもむろに開き、囚人服の松方弘樹からサインを貰われた。煙突の穴からすべり落ちた猫が、鳴いていたこともある。正面の丸い穴の網から入り込んだ鳩が、天井に巣を作ったこともある。今、穴は両方とも塞がっている筈である。煙突の上に半月がかかると、ドラキュラハウスだと言って喜んだのは、ポンペン先生である。引っ越してしばらく、踊り場と階下の階段の壁に、横向きに空中を歩いたような靴跡があったことがあるが、いつか消えてしまった。ドラキュラよりも、幽霊よりも、火事だけはごめんである。連絡を受けて、夜の10時頃、人だかりしたセンターに到着したときには、もう鎮火していたが、煙臭かった。消防署の人にヘルメットを被って下さいと言われ、二階に駆け上がったら、天井にポッカリ穴が開いていて、消火の水がしたたり落ちていた。渡り廊下の白い壁は、無残にも黒く煤けていた。

「情報」という単語が、まだ軍の情報局という色合いを残していた時代と、IT ブームの現在では、ずいぶんその意味が異なってしまった。思えば、コンピュータは計算しかしないものだと思っていたし、人口衛星と図書館の関係など知らなかった。中央図書館にせっせと重い図書を車で運び、目録カードを作成して貰っていた時代に、センターの図書室で働くことになった。今や、書誌レコードは、傍らの端末からアクセスでき、外国の図書館の図書や雑誌であろうと、一度電子形態になっていれば、世界の共通な知的資源として、使う時代である。日本の郵便制度であれば、一週間もかからずに依頼した論文が到着し、外国人研究者を驚かすこともできる。ただ、今後もまだ情報や図書館は、時代と共に変化して行くであろう。Virtual Libraryには図書館という建物すらない。

坪内良博 AA 研究科教授停年退官

長らく東南アジア研究センター教授を務められ、その後大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（AA 研究科）に移られた坪内良博先生が、2000（平成12）年度末をもって停年退官された。先生は、1966（昭和41）年5月の東南アジア研究センター助手への就任以来、32年間センターに在籍され、センターにおける地域研究の発展に大きく貢献された。その間、1993（平成5）年からの4年7カ月は、所長として、センターが直面した難局を切り抜けるために粉骨砕身された。1998（平成10）年に大学院 AA 研究科に移られてからは、初代研究科長に就任され、新設なった研究科の立ち上げと地域研究を柱とする教育の推進に尽力されている。

3月8日に最終講義が開催されたが、「地域研究彷徨35年――個人・集団・組織」という題のもと、地域研究との関わりの3つの形を下敷きに、ご自分の研究歴を振り返られた。先生の業績を研究内容に即して通観すると、地域研究的視点に基づく人口研究を基軸としながら、広い分野にわたるテーマを扱ってこられたことがわかる。その中でおそらくもっとも著名なものは、「小人口社会」を鍵概念として、東南アジアの特徴を中国やインドとの比較において把握しようとした著作であろう。19世紀半ばまでの東南アジアは小人口・疎人口社会と特徴づけることが可能であり、

院生から贈られた似顔絵を囲んで記念撮影

最終講義をされる坪内教授

この地域における政治権力のあり方、都市の形成、フロンティアの開拓などを、地域の人口学的特性から理解しようとする試みは、東南アジア研究のみならず人口学においても斬新なアプローチを提示するもので、その成果にたいし日本人口学会賞が授与されている。同じアプローチをミクロレベルで実証的に研究したものが、マレーシアのクランタン州の一村落における定点継続調査で、20年にわたる研究の成果は単著として刊行され、現在続編としてさらに10年後の村落の変化をまとめるべく準備されているとのことである。

最終講義に続き京大会館において開催された祝賀会には、教官、院生のみならず、多くの旧センター教官・事務官が詰めかけ、昔話に花が咲くとともに、和やかな会となった。4月からは、先生は神戸の甲南女子大学文学部に新設される多文化共生学科の教授に就任される。海の見える研究室で、「マレーシア農村の30年」をまとめ、さらには東南アジア小人口社会についても新しい展開を考えたいと話されていた。ますますご活躍され、いずれ地域研究彷徨45年をお聞きできる機会のあることを願っている。

（文責：加藤　剛（AA 研究科））

西村重夫助教授逝去

統合環境研究部門の西村重夫助教授は、2000年11月急逝されました。享年49歳。

西村助教授の専門は比較教育学で、1976～77年バンドン教育大学に留学されて以来一貫してインドネシアにおける国民教育の発展、特にインドネシアに固有の価値観であるパンチャシラ道徳教育の研究に従事してこられました。これまで学術雑誌等に発表された諸論考を集大成する著書を準備されていた矢先のことで、その早世が惜しまれます。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

＜センター来訪者＞

10月10日Mr. Muhamad Hisyam（LIPI 社会文化研究センター研究員）他2名▽10月26日Mr. U Thein Hlaing（ミャンマー連邦教育省歴史研究局副総局長）、Mr. U Tun Aung Chein（ミャンマー政府歴史委員会委員）他3名▽10月30日Dr. S. D. G. Jayawardena（スリランカ農業局長）他3名▽11月22日Mr. Muhammad A. S. Hikam（インドネシア研究技術担当大臣）他5名▽12月1日Dr. Deanna Donovan（イースト・ウェストセンター環境プログラム研究員）他1名▽12月1日Prof. Michael Leigh（サラワク大学東アジア研究所）他1名▽12月14日Prof. Jean-Luc Maurer（ジュネーブ大学開発研究大学院所長）、Mr. Medhi Krongkaew（タマサート大学准教授）他2名

COE国際会議開催

平成13年1月19日より3日間にわたり、国際会議「地域研究：これまでの経験とこれからのヴィジョン」が、文部科学省科学研究費「中核的研究拠点形成（COE）プログラム：アジア・アフリカにおける地域編成－原型・変容・転成」の助成のもとで、京都大学東南アジア研究センターおよび大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（AA 研究科）の主催により京都国際交流会館で開催された。全142名の参加者のもと連日活発な討議が行われ、世界各地で展開している個別分野としての人文・社会科学領域に対して地域研究によるアプローチ、とりわけ地域間比較研究による地域横断的な課題の検討が急務であることが確認された。

シンポジウムは、第1部「研究機構の構築」と第2部「生活世界・イデオロギー・国家形成・資本主義」の2部構成で行われ、第2部は「アフリカの変貌：環境、農業、日常生活」「スーフィー思想と地域形成：アジア・アフリカにおけるイブン・アラビーとその学派」「植民地時代およびポスト植民地時代のアジア・アフリカにおける国家形成」をテーマに、3つのセッションで活発な議論が交わされた。

第1部では、カリフォルニア大学ロスアンジェルス校東南アジアプログラム所長のアンソニー・リード、北欧アフリカ研究所所長のレナルト・ヴォールゲムート、エチオピア国際開発研究所所長のテゲネ、東京大学東洋文化研究所所長の原洋之介が報告者となり、各機関における研究経営、教育経営がどのように行われているかが報告された。

第2部のセッション1では、京都大学大学院 AA 研究科の荒木茂・掛谷誠によるアフリカ在来農業の生業維持機構、ザンビア大学のチドゥマヨによる農業変化とその環境への影響、フロリダ大学のアブラハム・ゴールドマンによる経済変化・人口増加とそのインパクトについての報告のあと、

東南アジア研究センターの田中耕司が討論者として参加した。

セッション2では、地域研究研究科の東長靖やマッギル大学のビライ・クスピナールによるスーフィズムの展開とその知的インパクトに関する報告、およびイスラーム思想文明国際研究所のバハルディン・アフマッドによるスーフィズムの東南アジア・イスラーム世界への影響について報告が行われた。上智大学の赤堀雅幸、山口大学の中田考が討論者となり、地域形成や反植民地運動、国家形成に果たしたスーフィズムの役割が検証された。

第3セッションでは、「国家形成」を主題に、ワシントン大学のメリー・キャラハンが植民地ビルマのケースを、ノースウェスターン大学のウィリアム・リノがナイジェリア、東南アジア研究センターのパトリシオ・アビナーレスがフィリピンの事例を検討した。大阪大学の栗本英世、神戸大学の片山裕が討論者となり、ポスト植民地国家に残る植民地時代の遺物、とくに中央と周辺の構造、軍や地方ボス、私兵などの問題が指摘された。

（文責：石川　登）

COEだより　地域を理解するための手法は？

前号で、「地域研究の世界的なセンターを作る！」という元気のよいタイトルで「COE だより」をお伝えした。「通常、わたしたちが『東南アジア』『南アジア』『西アジア』『アフリカ』などと呼ぶ地域がそれぞれどのような構造的特徴をもっているのか、こうした地域がたしかに地域と呼びうるとすればそれはどのような意味においてか、などの問題を明らかにしようとしている」という文章で、地域研究の目指すところを掲げておいたが、「どうしたら、それらが明らかになるのか」について、すじ道を示していなかった。そこで、COE がその問題にいまどのように取り組もうとしているのかを、お知らせすることにしたい。

各地域の構造的特徴に迫るには、さまざまなディシプリンの共同が必要である。そしてその共同によって、地域の特徴はかなりの程度明らかにされるであろう。そして、いまではこのような学際的な共同に代わって、ディシプリンを越境することも、地域の構造的理解に至る地域研究（者）のすじ道として提示されている。

では、「どのような意味において」地域なのかという設問に、どう答えていけばよいのだろうか。いま、COE が取り組もうとしているのは、そのすじ道に至るための地域間比較研究の手法開発である。地域の個性や固有性という言葉がよく使われるが、何に準拠して個性や固有性があぶり出されているのか、地域研究者のあいだでこの問題が十分に論じられてきたわけではない。グローバルスタンダードを基準に地域の特徴を測ることは可能としても、それが地域の個性や固有性を明らかにする道でないことは、地域研究者がそれぞれのフィールドで肌で感じていることである。そこで出てきたのが、もっとありのままに地域の個性を描くために、よその地域と比べてみたらどうか、というのが地域間比較研究の発想である。たとえば、東南アジアをフィールドとしてきた研究者とアフリカをフィールドとしてきた研究者が共通の問題で地域を比較するなかから地域個性を明らかにできないか、というわけである。地域を俯瞰的に見る比較共同研究へ、ということになろうか。COE では、昨年度から検討し始めた地域間比較研究がいまようやく端緒につこうとしているところで、この研究会の世話人が各クラスターから出て、構想を練っているところである。5月にはその第1回のワークショップが予定されている。そこでどんな議論が飛び交うのか、COE 事務局としては期待半分、不安半分という状態で、ワークショップの成り行きに注目している。

（文責：田中耕司）

拠点大学セミナー
タマサート大学で開催

1997年7月、タイ・バーツの危機が引き金となってASEAN諸国を中心にアジア通貨が動揺した。タイ経済は85年以降10年間にわたって、年平均9%超の高度成長を続けてきたが、96年は輸出の低迷と内需加熱に対する金融引き締めで成長率が急減した。のみならず、外資に依存した不動産投資の行き過ぎから金融機関が大規模に不良債権を抱えるようになった。こうした背景のもと、バーツの急落からはじまるアジア危機が発生したのである。フィリピン・ペソ、マレーシア・リンギット、インドネシア・ルピア、シンガポール・ドルなど近隣のASEAN諸国通貨、さらに同年秋には韓国ウォンにも混乱が広がった。

こうした経済危機に対する対応はIMF・世銀の処方箋に沿った政策運営をしたタイと、為替レート固定、短期資本流出規制を強行したマレーシアとは対照的であった。この2カ国の対応をテーマに、2000年10月24日と25日の2日間、JSPS拠点大学プロジェクトの国際セミナー、「政府・市場・社会・地域統合の政治経済学：マレーシアとタイの比較」がタマサート大学で開催された。

タイについてはバヌポン準教授（タマサート大学）、マレーシアについてはマハニ教授（マラヤ大学）とライ教授（マレーシア科学大学）がそれぞれポスト危機の各国経済の事情をサーベイし、これまでの学術的研究の蓄積を紹介し、現状に関する知見を披瀝した。これに加えて、高木教授（東京大学）は広くアジア全体を俯瞰して、一般的な議論を展開した。シンガポールからはタンガベル助教授（シンガポール国立大学）がマレーシアとのリンケージを軸にシンガポールの対応を議論した。20数名のタイの専門家も積極的に議論に参加した。このテーマでの研究の現状を参加者の共通の理解とすることができ、プロジェクト全体の統合性の確保ができた。と同時に、タイのコミュニティに拠点大学共同研究の存在をアピールすることができたのは大きな収穫であった。

（文責：阿部茂行）

チャオプラヤデルタ・コンファレンス開催される

2000年12月12日から15日までの4日間、バンコクのカセサート大学において、「チャオプラヤデルタ――タイの穀倉の開拓史、ダイナミクス及びチャレンジ」という国際会議が開催された。カセサート大学が幹事校になり、チュラロンコーン大学、フランスの国際開発研究所、それに東南アジア研究センターの4機関共催というかたちをとった。発表論文は58編に及び、参加者はタイの研究者を主体に約200名を超えた。日本からは10数人が参加し、11編の論文が発表された。

会議は次の6セッションからなっていた。デルタ的生活の伝統とその変貌（6編）、土地利用（11）、水利用と環境問題（17）、農村社会と経済の変化（8）、デルタとバンコク（7）、より広い地域の中におけるチャオプラヤデルタ（7）、及びポスター（2）。最後の日は、アユタヤ歴史探訪・浮稲地帯・ダムヌーンサドゥアクの園芸地帯へのエクスカーションにあてられた。論文の多くは、このデルタの急速な変貌の諸相を掘り下げようとしたもので、数からいうと、とりわけ土地・水利用の変貌、都市化の影響、水質汚濁などを取り扱ったものが多かった。カセサート大学の若手研究者の実証的な研究報告が目立ったが、これはフランス開発研究所の長年にわたる研究協力の成果であったことを特記しておきたい。また、日本人の大学院生を含む若手の台頭も印象的であった。

会議案内から論文募集、論文のやり取りまですべて電子化され、発表のほとんどはパワーポイントを用いて行われた。また、大部のプロシーディングスは会議当日までに準備され、会議直後にはすべての論文がウェブサイト（http://std.cpc.ku.ac.th/delta/deltacp/home.htm）で公開された。こういう「近代化」においても、先端を切る国際会議であった。

（文責：海田能宏）

出版ニュース

◇『東南アジア研究』38巻3号

Farmers and Forests: A Changing Phase in Northeast Thailand. Buared Prachaiyo▽書評 David M. Ayres. *Anatomy of a Crisis: Education, Development, and the State in Cambodia, 1953 - 1998.* 小林　知▽現地通信「2000年のパシルマスから」坪内良博▼「タイとマレーシアの食文化」西渕光昭

◇『東南アジア研究』38巻4号

Higher Education Reform in Thailand. Sukanya Nitungkorn▼Only Yesterday in Jakarta: Property Boom and Consumptive Trends in the Late New Order Metropolitan City. Arai Kenichiro▼「ジャワ農村における住民組織のインボリューション――スハルト政権下の『村落開発』の一側面」島上宗子▼「ダバオ市におけるバジャウの都市経済適応過程――経済的福祉とエスニック・アイデンティティの観点から」青山和佳▼「南機関小稿」武島良成▽書評 Jérôme Rousseau. *Kayan Religion: Ritual Life and Religious Reform in Central Borneo.* 井上　真▽現地通信「ラオスではなぜ植物油が利用されないのか」田中耕司

◇ 研究報告書シリーズ

■Kannikar Linpisal. 2001. *Library Acquisition List: Thai Materials.*

■――――. 2001. *Standardized Romanization of Thai Government Agency Names in Thai Publication Titles.*

＜その他の出版物＞

■浜下武志. 2000.『沖縄入門――アジアをつなぐ海域構想』ちくま新書.

■山田　勇. 2000.『アジア・アメリカ生態資源紀行』岩波書店.

人　事

＜新任＞

北村由美助手（2001年4月1日付）。1972年9月9日生。96年3月関西大学文学部英文学科卒業。96年4月から97年12月（株）インターグループソフト開発部勤務。98年1月ハワイ大学大学院図書館情報学修士課程入学。99年12月同修士課程修了。99年6月から2000年7月 COE-DMHA（在ホノルル米国防衛庁外部団体）にてインフォメーション・リサーチアナリストとして勤務。2000年9月ハワイ大学図書館（ビジネス・人文社会科学部門）レファレンス司書。

＜国内客員部門＞

仁連孝昭教授（2001年4月1日付）。1948年10月8日生。71年3月大阪市立大学経済学部経済学科卒業。79年10月京都大学大学院経済学研究科博士後期課程退学、広島大学総合科学部助手。83年4月日本福祉大学経済学部助教授。93年4月同学部教授。95年4月滋賀県立大学環境科学部教授。

〔主要論文〕

An Impact Analysis of Shifting Cultivation in the Forest of Northern Laos, Using GIS and Satellite Image. In *Proceedings of the 20th Asian Conference on Remote Sensing,* 1999.（共著）▽GIS and Remote Sensing for Natural and Socio-Economic Parameters. In *Can Biological Production Harmonize with Environment?* Asian Natural Environmental Science Center, The University of Tokyo and Institute of Advanced Studies, The United Nations University, 1999.（共著）▽Shifting Cultivation in the Nam Khan Watershed, Luang Prabang Province, Lao PDR. In *Environmental Sound Development and Quality of Life in Shifting Cultivation Areas.* Department of Forestry, Lao PDR, Nihon Fukushi University and The United Nations Centre for Regional Development, 1996.（共著）

阿部健一助教授（2001年4月1日付）。1958年11月9日生。84年3月京都大学農学部農林生物学科卒業。89年11月京都大学大学院農学研究科博士後期課程退学。89年12月京都大学東南アジア研究センター助手。96年5月国立民族学博物館地域研究企画交流センター助手。99年3月同センター助教授。

〔主要論文〕

「泥炭湿地林――スマトラの開拓移民と開発の将来」『TROPICS』6（3），1997.▽「地域生態史の視点」『地域研究論集』1（2），1998.▽「神の山のゆくえ――雲南の人と森」『森と人のアジア』（講座人間と環境）山田勇（編），昭和堂，1999.

■外国人研究員

・Neferti Macagba Tadiar（フィリピン）。カリフォルニア大学サンタクルズ校助教授。招へい期間2000年12月21日～2001年9月15日。研究題目「最近のフィリピン・モダニティにおける歴史的研究」

・Abdul Halim（バングラデシュ）。バングラデシュ農科大学教授。招へい期間2001年1月5日～7月4日。研究題目「バングラデシュにおける半世紀の農業普及事業の効果：1951～2000」

・Medhi Krongkaew（タイ）。タマサート大学准教授。招へい期間2001年1月10日～7月9日。研究題目「各国の対APEC対応における政治経済学：比較分析」

・Saw Kelvin Keh（ミャンマー）。ミャンマー農林研究所教授。招へい期間2001年3月12日～2002年2月17日。研究題目「南・東南アジアにおけるチーク林の保護・育成についての新しい考え方と対策」

・Sompong Charoensiri（タイ）。マハサラカム大学学術情報センター副館長。招へい期間2001年4月11日～10月10日。研究題目「東南アジア研究センター図書のタイ語文献のデータベースシステム」

◎ "Introduction to Ecological Medicine for Non-Medical Ecological Researchers" by *Matsubayashi Kozo,* October 26, 2000.

One myth about aging is that "the elderly are all alike." Conversely, it is said of the infirmities of old age that "as people grow old, they become unequal."

Modern medicine has been investigated from both the purely biological and the social viewpoints. However, in order to fully study the phenomena of human aging, it is important to conduct research among people in a variety of locations where the natural and cultural environments are completely different.

I discussed the concept of "ecological medicine" based on my field research. Ecological medicine (EM) includes three methodological areas: (1) time-axis related EM, which investigates longitudinal human age-related changes in a fixed area; (2) geographically vertical EM, which investigates human physiological and psychosocial changes in high altitude areas; and (3) geographically horizontal EM, which investigates internationally cross-sectional comparative differences in human physiology and pathology.

My field research shows that disease, health, aging, and death are not only purely biological, but relative, ecological, social, and culture-related conceptions. EM, which has not yet acquired "citizenship" in the medical world, may be a medico-scientific approach that will aid in the comprehensive understanding of bio-ecological human beings.

◎"Intensified Agricultural Systems in the Red River Delta of Vietnam" by *Yanagisawa Masayuki,* November 22, 2000.

One of the major characteristics of the Red River Delta is overpopulation, with a density of approximately 1,000/km^2. Although it is often said that land use is more intensified than in other Southeast Asian countries, "intensification" is only an impression. For the purpose of understanding the intensified agricultural system concretely, this study focused on the cropping system of one village, especially rice and vegetable cultivation. Based on an agro-ecological analysis of physical conditions and cultivation techniques, the intensified agricultural system was evaluated. In summer-rice cultivation, the amount of fertilizer applied was not reflected in the rice yield; furthermore, the expansion of the cultivation area made working hours for rice cultivation longer and, as some rice plants did not grow tall enough before the flooding season, increased the area damaged by flooding. More inputs of capital and working hours were, therefore, not reflected in increased rice yield, and, in this sense, rice cultivation has been technically intensified up to the highest level under the present conditions. In spring-rice cultivation, there was no expansion of the cultivation area or increased input of chemical fertilizers, even though these were technically possible. Farmers preferred vegetables over rice for cash income, because of the low selling price of rice. In vegetable cultivation, the area planted, working hours, and capital could be intensified more, even though the cropping intensity was more than 10. More intensification was blocked by socio-economic factors, such as a shortage of market information, undeveloped network and distribution systems, and many economic regulations. As a whole, more intensification both in rice and vegetable cultivation was technically possible, and improvement of socio-economic factors was necessary for rural development.

Colloquium

◎"Weaving Saron, Weaving Network in the Makassar Straits" by *Hamamoto Satoko,* December 21, 2000.

On the Sukun Island, in the Makassar Straits, the weaving of hand-woven textiles (*sarong*) in traditional ethnic patterns and colors is a major subsistence activity. The way *sarong* are distributed is closely interrelated with the other important subsistence activities of trading and fishing for highly valued maritime products. In general, women are engaged in weaving sarongs, and both women and men play the role of intermediaries. Orders for *sarong* are obtained not only in the vicinity of the ↗

■招聘外国人学者

・Trisilpa Boonkhachorn（タイ）。チュラロンコン大学教養部助教授。2000年11月23日～12月21日。「ヘゲモニーの構造変化（ネットワークの比較史）」

・Srawooth Paitoonpong（タイ）。タイ開発研究所上席専門研究員。11月27日～12月5日。「国家・市場・社会・地域統合のロジックとアジア経済」▽Lai Yew Wah（マレーシア）。マレーシア科学大学社会科学部教授。11月29日～12月6日。「同」▽Shandre Thangavelu Mugan（タイ）。シンガポール国立大学経済学科助教授。2001年2月19日～27日。「同」

・Kasian Tejapira（タイ）。タマサート大学政治学部助教授。3月1日～29日。「知的ヘゲモニーの構造（仕掛け）：テクノクラシー」

・Olarn Chaipravat（タイ）。チュラロンコン大学経営大学院理事長。3月8日～23日。「国家・市場・社会・地域統合のロジックとアジア経済」▽Bhanupong Nidhiprabha（タイ）。タマサート大学経済学部助教授。3月16日～24日。「同」▽Hongpha Subboonrueng（タイ）。タマサート大学経済学部講師。同。「同」▽Nongnuch Soonthornghawakan（タイ）。同。3月16日～31日。「同」

・Naris Chaiyasoot（タイ）。タマサート大学学長。3月20日～23日。「今日のタイの政治と経済復興」

＜事務官人事＞（4月1日付）

□足立巖専門員は、総合人間学部人間・環境学研究科専門員に配置換。後任に上村昭男研究協力部留学生課専門員。

□宮田浩行会計掛長は、工学部等学術協力課専門職員に配置換。後任に美馬敏男薬学部会計掛長。

□前田満喜子教務掛主任は、3月31日をもって定年退職。後任に潮崎晴之総合人間学部人間・環境学研究科全学共通科目掛主任。

↘ island, but also in distant destinations of trading and fishing expeditions, such as the east coast of Kalimantan, the northern coast of East Java, and the eastern part of Indonesia. Furthermore, as most orders for *sarong* come from migrants from the island, it is natural to think that part of the socio-economic network of the island can be traced through the trading routes. *Sarong* woven by the islanders conform to Islamic tastes and proscriptions against representations of animals or the human body. These days, in rural communities, and even in non-Islamic mountain regions, *sarong* with checks and squares are still worn not only as daily wear but also as special wear for ceremonies. *Sarong* weaving and its distribution can illuminate regional dynamics in the Makassar Straits.

◎"Retelling the Story: Christian Missionaries Meet the Karen in Early Nineteenth Century Burma" by *Hayami Yoko,* February 22, 2001.

As an introduction to my burgeoning interest in Burma, my talk consisted of two parts. The first half was based on my re-readings of historical material on nineteenth century Burma regarding missionary activities among Karen, and the second half (with slides) was based on recent trips. My purpose in both was to talk about the "nationalities" of Burma in a way that differed from hitherto prevalent scholarly and other discourse, as well as from official representations, and to take into account the diversity of Karen subsistence patterns, languages, religions, and self-representations. Beginning with Christian missionary activity and British administration, the history of Karen nationality has taken a monolithic path. Such historical narrative began very early in the missionaries' own accounts and was subsequently taken up by scholars and other agents in Burmese history. This monolithic narrative not only hinders good research, but also feeds into existing divisions and misunderstandings. By re-telling the story, including Karen's own initiatives and the religious dynamics that underlay the initial stages of Christianization, I hope to undo these narratives and throw light on the diversity in Karen history.

◎"Educating the Modern Malays: Colonial Education and Malay Identity in British Malaya" by *Soda Naoki,* March 22, 2001.

In this presentation I examined the interrelationship between colonial education and the formation of Malay identity in British Malaya during the 1920s and 1930s by comparing two leading residential secondary schools for Malay students: a Malay vernacular and an English-language "college." My main concern was to understand how and to what extent common knowledge and experience at these schools helped to form Malay identity among the students. According to my observation, there were at least three paradoxes of colonial education in British Malaya. First, colonial education tried to conserve a distinctive Malay character while modernizing education for Malays. Second, it sought to retain social distinctions between the ruling class and the commoners while popularizing modern education. And third, it compromised with the strong provincial identities of the Malays in the process of centralization. I concluded that the emergence of the politics of Malay identity in the 1930s can be better understood in the context of these paradoxes between integration and differentiation.

海外調査だより

大往生

速水　洋子

今年1月、1年半ぶりに、長年通い続けている北タイのカレンの村を訪れた。ほんの三日の滞在は、忘れえぬものとなった。隣の集落の老婆が死の床についているという。彼女には実際に頻繁に会っていたわけではない。しかし、彼女は私のこれまでの調査の中で重要な人物だった。

オヘという家族の儀礼を、周辺5集落で最も大規模に主催するのが彼女だった。なぜなら、彼女には母系にたどる子孫が5世代にわたり30人もいたからだ。30代で夫を亡くし、それからは女手一つで娘たちを育てた。オヘのことや、娘たちが小さかった頃、米が足りなくて40キロ離れた町まで米を背負いに歩いて行った話などを、何度か聞かせてもらっている。私は彼女の家系図を書いて、「大きなオヘの事例」として発表させてもらっていたのだ。大きなオヘを主催する女性は敬われ、長老として知恵袋として頼られる存在であると。しかしこの日私は不安だった。これまでに一対一で話したのは四度くらい、しかも最後に会ったのは3年も前だ。彼女が私に会いたがっていると言われても、本当だろうか、という思いのほうが強かった。行きずりの外国人に、いまわの際に会いたがるものだろうか。

もう何年も彼女の棲家となっている小さな掘っ立て小屋を訪ねる。三畳ほどのスペースに炉が切ってある。この狭い小屋で30人ものオヘを取り仕切っていたのだ。今は、その炉を背に、孫息子を背もたれにして座っている。娘二人と孫娘、ひ孫娘達が集まっている。戸口から入ると、おそらく光が遮られたのでわかったのだろう、すぐこちらに顔を向けた。顔には死相が明らかだった。左半身は麻痺して動かないので、右手で来客を迎えられるような位置で寝ているのだ。背中の孫息子が「日本から姪っ子が来たよ」と言う。わかっているのだろうか。すると、どこにそんな力が残っているのか、と思うような勢いでさっと手を差し伸べて私の手を握るとしばらく離さない。私は何を言って良いかわからず、しばらく空いた手で皺くちゃの骨ばった腕をさすっていると、タバコを欲しがっているのだ、と娘が言い、日本から持ってきたタバコを渡すと娘は箱をあけて母親の口に一本くわえさせる。もう何日も食べ物も食べられないのに、タバコだけくわえたがるのだという。そういえば元気な頃はいつもパイプをくわえていた。しばらくそうして手を握ってから暇を告げようとした。すると、老婆がまっすぐ私の目を見つめてはっきりした声で「ありがとう」と言った。そして「遠い道」と。私が来た道のことか、それともこれから彼女が出かける旅のことか。孫の一人が、「これで日本人に生まれ変われるかも知れないね」。孫息子に抱かれ、娘、孫娘、ひ孫娘に看取られながら彼女は私の手を握って、何を思ったのだろう。私の方は、言いたかった「ありがとう」を言う声も失い、骨張った手をもう一度握りしめた。30人のオヘは彼女の死とともに終わる。これからは、娘、孫娘たちがあちこちでそれぞれのオヘを行うのだろう。

（センター助教授）

研　究　会　報　告

◆Special Seminar
11月9日 Nik Hassan Shuhaimi Nik Abdul Rahman（センター外国人研究員）Faces of Traditional Maritime Malay World Perahu▽11月11日 Agus Wijoyo（インドネシア陸軍中将）The Future of the Indonesian Military Reform▽12月14日 Resil Mojares（センター外国人研究員）Jose Rizal and Southeast Asian Studies ▽12月15日Shee Poon Kim（立命館大客員）China's Responses to the 1998 Anti-Chinese Riots in Indonesia

◆"Rethinking Philippine Studies" 12月8日
Resil Mojares（センター外国人研究員）The Local in Philippine Studies▽Reynaldo C. Ileto（東京外大客員）American Scholarship and the Filipino-American War ▽Temario Rivera（国際基督教大客員）Rethinking Clans Politics in the Philippines▽白石隆（センター）Discussant

◆"Core University Program Seminar"
11月7日 Odine de Guzman（フィリピン大）Overseas Filipino Workers and the Feminization of Migration ▽12月1日 Lai Yew Wah（マレーシア科学大), Srawooth Paitoonpong（タイ開発研究所）Rebuilding the Economy after the Crisis: Thailand and Malaysia▽2月23日 Shandre Thangavelu（シンガポール国立大）Can Singapore Be a Leading High Tech State in Asia?▽3月21日 "Round Table on Contemporary Thai Economy and Politics" Naris Chaiyasoot（タマサート大）Current Thai Politics and Economic Recovery▽Bhanupong Nidhiprabha（同）Macroeconomic Policy Lessons from Japan▽Kasian Tejapira（同）Economic Nationalism in Post-Crisis Thailand ▽ "Part 1: Roundtable Discussion: Where Is Thailand Going"▽" Part 2: Thailand and the World" Olarn Chaipravat（チュラロンコン大）Regional Financing Arrangement ▽Medhi Krongkaew（センター外国人研究員）The New Foreign Economic Policy of Thailand and Its International Implications

◆「民族間関係・移動・文化再編」第11回研究会「東南アジア近代史におけるジェンダーと家族をめぐる言説の構築」12月15日
小泉順子（東京外大）「近代シャムにおけるもう一つの "Family Politics"」▽服部美奈（岐阜聖徳学園大）「1930年代蘭領東インドにおけるムスリム女性のジェンダーをめぐるディスコース：1933年インドネシア女性会議を中心に」

◆「国家・共同体・市場」第4回研究会 "Contemporary Political Economy of Indonesia and Thailand" 12月15日
Jean-Luc Maurer（ジュネーブ大）Whither Indonesia?: Post New Order Political, Economic and Social Perspectives▽Medhi Krongkaew（センター外国人研究員）The Political Economy of the Thai Economic Crisis
◇「国家・共同体・市場」第5回研究会、2月2日
Hal Hill（オーストラリア国立大）East Timor: Development Policy Challenge for the World's Newest Nation

◆「農村開発における地域性：生活文化・暮らしの基層」第7回研究会「遺跡遺品の仏教調査からみたバングラデシュ古代仏教とその展開」1月23日
乾仁志（高野山大）「パーラ王朝における仏教遺跡」▽森雅秀（同）「パーラ王朝の遺品」▽藤田光寛（同）「パーラ王朝の仏教僧」▽越智淳仁（同）「ヴィクラマシーラ僧院崩壊よりものち4、5年存続した Jagaddala 僧院」

◆「農村開発における地域性：農業普及」第8回研究会「戦後日本の普及事業に学ぶ」2月9日
第1部「日本の経験に学ぶ」
西潟範子（元新潟県生活改良普及員）「日本の生活改善運動概論」▽水野正己（農業総合研究所）；小林花（国際協力事業団）「愛媛県東宇和郡岡成集落の記録」
第2部「日本の経験を途上国に生かす」
勝井恵子（元京都府生活改良普及員）「生活改良普及員の経験から」▽高岡ミエ子（元愛媛県生活改良普及員）「普及員 OB から見た協力隊プロジェクトの課題」▽小國和子（千葉大）「農村開発において外部者が関わる意味」

◆「東南アジアの生態環境」研究会「環ヒマラヤ広域圏における社会と生態資源変容の地域間比較」2月7日
阿部健一（民博地域研）「角材を運ぶ人々：サルウィン河上流部の森林利用の変化」▽河合明宣（放送大）「ネパール・シェルパ集落社会の変容：ナムチェ・バザールを中心に」

◆研究会、3月2日
伊東利勝（愛知大）「エーヤーワディ流域地方における『権力と土地利用』の変遷」

◆「東南アジア大陸部」第3回研究会、3月6日
Terry A. Rambo（センター）Development Trends in Vietnamese Northern Mountain Region▽Dao Minh Truong（センター招聘外国人学者）Land Cover and Landuse Changes in Vietnamese Northern Mountain Region▽Nghiem Phuong Tuyen（同）Rural-Urban Relations and Rural Development in Northern Uplands of Vietnam

◆東南アジアの自然と農業研究会
第98回例会：12月22日根本和洋（信州大）「ネパールにおけるアマランサスの栽培・利用：人々はこの作物をどう受け入れたか」
第99回例会：2月16日「環境保護政策下における農民の対応：ベトナムとラオスの山岳地帯からの報告」
太田翼（京大）「ベトナム北部における農民造林の進展とその要因：フート省イエンラップ郡の事例」▽岡田尚也（同）「ラオス北部農村における焼畑面積の拡大とその要因について：Oudomxai 県 La 郡 Lak15 村の事例」
第100回記念例会：4月20日　田中耕司（センター）「趣旨説明」▽高谷好一（滋賀県立大）「東南アジアの野と森と海：20年の軌跡」▽福井捷朗（立命館アジア太平洋大）「地域研究のなかの農業研究」▽長津一史（京大 AA 研究科）「海域研究の歴史と現状そして今後の課題（展望）」▽河野泰之（センター）「農業研究の歴史と現状そして今後の課題（展望）」▽阿部健一（民博地域研）「森林研究の歴史と現状そして今後の課題（展望）」

あれから10年

江崎　光男

京都大学東南アジア研究センターから名古屋大学大学院国際開発研究科へ1991年4月に移籍してから丁度10年になります。国際開発研究科はこの年に発足しましたから、今年度は創設10周年にあたり、記念式典、記念講演会、記念シンポジウム等の諸行事がとり行われました。記念講演会には、東南アジア研究センターの初期の所長を長く務められた市村真一先生をお招きし、「経済発展と国づくり」というテーマで、東南アジア研究センター以来の30有余年にわたるアジア研究を濃縮した、感銘深いお話を伺うことができました。

記念シンポジウムは、「21世紀国際開発学の展望――グローバルなものとローカルなものとの交錯の中で」というテーマで、政治、経済、教育、法学（以上がグローバルな視点）、経営、民族、文化、英語支配（以上がローカルな視点）の8報告がなされ、「国際開発学」におけるそれぞれの分野（ディシプリン）の存在意義をかけ、活発な議論が交わされました。8人の報告者は、国際開発研究科の総勢40数名と10を越える社会科学分野のディシプリンをいわば代表するスタッフであり、「国際開発学」という新しい未確立の領域をいかに学際的に研究し教育するか（あるいはしないか）に焦点が当てられました。

グローバルな視点のセッションに司会者として参加し、ローカルな視点のセッションをフロアから聞いているうちに、まるで20年前（1980年代）の東南アジア研究センターにいるかの感覚を覚えました。当時の東南アジア研究センターは（今もそうかもしれませんが）、地域研究のあり方・方法論およびセンターや自らの存在意義をめぐって侃々諤々の議論が頻繁になされていたように思います。

現在の国際開発研究科も似通った状況にあります。つまり、「国際開発学」を開発途上国の開発問題を研究する学問領域であり、必然的に開発協力の分野を含むと定義するなら、それは地域研究と政策科学の融合された学問領域となり、政治・経済・社会・文化・教育・保健・情報など網羅的にディシプリンを取り込まざるを得なくなります。問題は、研究科として、スタッフとして、学際的な研究と教育をどう実現するかであります。シンポジウムの結論はその第1歩にあるという位置付けでしたが、「参加型開発」は学際的アプローチの適例の1つと考えられます。先輩東南アジア研究センターのお知恵を拝借したい所以です。

（1969.4～1991.3 東南アジア研究センター助手・助教授。現在名古屋大学大学院国際開発研究科教授）

東風南信 REFLECTIONS

学生とアジアと「癒し」

木之内　秀彦

私の勤務する大学では、1年生全員を対象として、主にアジアの9コースから希望する一つを選んで1週間程度かけて短期の海外研修を積ませる行事を実施している。これには学生の視野を広げるという教育目的と共に、私学として学生募集の宣伝材料にしたいという期待も込められている。私も過去2年間タイ研修グループの引率を務めた。

研修とはいっても、さすがにリゾート巡りや買い物ツアーこそしないものの、名所・旧跡・有名寺院見学といったいわゆる観光の定番コースが殆どで、修学旅行に近い。私自身は観光も立派な研修の一つであり、そこから関心が更に発展することもあると考えているし、学校が責任をもつ公式行事としてやる以上はどうしても無難な、従って定番の観光に近い内容にならざるを得ず、参加する学生も全員が高いモチベーションを持っているわけではないので、高いテンションが要求されるハードな内容の研修など土台無理である。それでも学生に帰国後に提出させたレポートを読むと、「日本の長所・短所が良く見えるようになった、日本そして自分がいかに恵まれているかを痛感させられた」といった、月並みだが重要な感想を抱いたことが記されている。

この行事も含め私の大学では、学生に積極的に海外に出て異文化体験を積むことを奨励している。短期海外研修、語学留学、ボランティア、はたまた放浪を含め在学中に海外経験を積んだ学生には明らかに「大人に」成長した兆候がみられることから、大学としてもできる限りサポートしようというわけである。確かに海外経験には高い教育上の効果はある。しかし海外を見聞することでしか日本（人）の問題を認識できないようであれば、私も含め教育に携わる者の無力と限界を反省する他はない。

ところで、大学の働きかけが奏功したか否かは不明だが、3、4年になると単独で外国旅行をする学生が増えてくる。それもなぜか行き先はアジア、特に東南アジアが多い。そして帰国後に「（東南アジアは）妙にホッとした、波長が合った」と口にする者が殆どだ。

他大学でも似た例があるのではなかろうか。どうして「アジア」で、なぜそこで「安らぐ」のか。ここで武田徹氏の論評の一節が参考となる。「文明的に進みすぎた日本で、せわしなく生きて疲れた時には素朴なアジアに戻って活力を取り戻す――、そんな旅の軌跡が（アジアに）イメージされる」（読売新聞2001年3月17日号）。（東南）アジアは日本人にとって「癒し」の場所になっているとの指摘だ。

アジアをセラピーの小道具として消費するのは日本人の傲慢さと解すべきか、貧困や停滞と裏腹の「素朴さ」を愛でるのは所詮は豊かな日本にいつかは帰れるという無意識の精神的余裕と優越感がなせる偽善か、それとも若者もアジアに「癒し」を感じるほど今の日本は息苦しいと捉えるべきか。アジアに「ハマる」若者が増えるのを素直に喜んでよいものか、複雑な心境だ。

（1987.12～1994.3 東南アジア研究センター助手。現在鈴鹿国際大学国際学部助教授）

PLACE NAMES AS CULTURAL EXPRESSIONS: KYOTO AND ITS REGIONS

By Voon Phin Keong

As a human geographer, I am often fascinated by place names and the ideas associated with them. My interest in East Asia leads me to flirt with such ideas in order to understand the underlying meaning geographical names convey. Like most visitors to Kyoto I am overwhelmed by the cultural richness of this ancient capital. Beneath the impressive cultural heritage that defines the historical centrality of Kyoto and its surrounding regions are many place names that symbolize the unity of the historical and political space in early Japan.

Although the city was originally known as Heian-kyo, the "capital of peace," the name Kyoto has endured more than a millennium of usage. It was modeled on Changan, the capital of Tang-dynasty China, reputedly built as a terrestrial model of the celestial order, and physically laid out to reflect the nine-fold division of the realm with nine longitudinal and nine latitudinal avenues. In Kyoto, one is tempted to associate the uniquely-styled Ichijo (First Avenue) through Kujo (Ninth Avenue) with these east-west avenues. As in Changan and later Nara, the central north-south avenue was the Suzaku (Scarlet Sparrow) Avenue. Clues to the existence of this avenue are embedded in such names as Suzaku Park and Suzaku High School near Nijo Castle. The word Suzaku is impregnated with cultural connotations. As in Changan, the palace was placed in the northern part of the city and the Suzaku-oji opened out from the imperial palace to the south. It later became the starting point of Sanyodo linking Kansai and western Honshu. In the Orient, unlike Ptolemaic but in conformity with geomantic principles, the south took precedence over other points of the compass. It was this direction that defined the eastern and western sections of the imperial city as Sakyo (left *kyo*) and Ukyo (right *kyo*) respectively. One may notice that Sakyo (left) and Ukyo (right) districts seem to occupy the "wrong" sides of the city. But if one were to face south like the ancients, the cultural significance of Sakyo and Ukyo begins to make sense.

The word *kyo*, as in China (pronounced as *jing*), historically affixed to the names of the capital cities of Japan, confers imperial recognition and connotes primacy of status and function. One notices that the imperial palace in Kyoto is surrounded by six districts identified as *kyo*, namely, Sakyo (left capital), Ukyo (right capital), Kamigyo (upper capital), Nakagyo (central capital), Shimogyo (lower capital), and Nishikyo (western capital). This structuring of the immediate imperial space could well represent a symbolic replication, in miniature fashion, of a traditional practice in China, later adopted in Korea, of locating the imperial capital in the inner sanctum of a larger imperial domain with secondary capitals at the margin.

All the ancient capital cities of Japan were founded in the core area of early Japanese civilization in the Yamato plain. Several ancient place names have survived to serve as reminders of the organization of imperial space in the past. Similar to the ancient Chinese worldview by which the Middle Kingdom was nestled within a series of tetragonal regions of declining cultural sophistication from the center, so was such a formation recognized as spreading outward from the Nara-Kyoto area. The word Kinki demarcated the boundary (*ki*) of the imperial domain, which became known as Kinai (inner boundary), a name in use since 646 A. D. (Similarly, in South Korea, ancient Seoul was the center of the imperial domain, and today the city is enclosed by a province called Kyonggi-do or "imperial domain province"). The continued use of the word *uchi* (meaning *nai*) in several place names in the Kinai area harks back to this period of history. Hence one is able to recognize several outer zones enclosing the Kinai inner core as Kingoku (nearby countries), Chugoku (middle countries), and Ongoku (distant countries). Today the terms Kinai and Chugoku are still current, with the latter referring to the former Sanindo region.

Consolidation of the political space was achieved through the establishment of major highways (*do*) radiating from Kinai. These *do* provided the spatial basis for the delineation of administrative regions. These included Tokaido (eastern seaboard route), Nankaido (southern seaboard route), Saikaido (western seaboard route), and Hokurikudo (northern inland route). Other routes were Sanyodo (the *yang* or southern slopes) and Sanindo (the *yin* or northern slopes). The northernmost region, historically the last frontier, was named Hokkaido (northern seaboard region). Today many of these terms remain as names of major rail routes, while Hokkaido is the only term that retains its administrative origin as a prefecture name. Sanyodo and Sanindo are reminiscent of the influence of the concept of *yin* and *yang*. As applied to surface features, *yang* (*yo*) refers to the southern slopes of mountains to signify masculinity and warmth. In contrast, *yin* (*in*) is the northern slopes and hence the female element of cold and the absence of sunshine.

In the seventh century, the government set up three armed barriers (*kan*) to prevent rebellion and control movement from the civilized west to the less advanced east. The most famous of these barriers was that between Shiga and Gifu prefectures, to the

west of which was Kansai, centering around Kyoto, and to the east Kanto, with Tokyo as the focal point. To this day, there is still a healthy rivalry between Kanto and Kansai in matters pertaining to cultural and economic life.

A speculation on the meaning of geographical names in the Kyoto area reveals a certain unity in the cultural diversity in Japan, China, and Korea. A deeper understanding of this subject should underscore the significance of the shared cultural heritage that is understandably the pride of the East Asian region. (Visiting Research Fellow)

ON BEING A FOREIGNER

By Neferti Tadiar

In an afterward to his book on Meiji literature, Kojin Karatani writes about the "origins" of his critique of modern Japanese literary history. Looking back, Karatani saw that it was his experience as a foreigner in the U. S. that compelled him to question the self-evidence of his sensibilities and to reexamine dominant preconceptions about Japanese modernity. When I received the request to write something for this newsletter, I was immediately compelled to reflect on my own experience as a foreigner here in Japan. Previous essays by other foreign scholars, I noticed, performed their foreignness in various ways, mainly by locating their national origins, implicitly or explicitly in relation to Japan. They focused on things national which helped to define themselves or their field of knowledge.

I reflected on my everyday experience of biking through Kyoto. Besides being an enjoyable activity, which I am not in the habit of doing in California, biking through these alternately bustling and quiet, wide and narrow, streets of Kyoto affords me the opportunity to further my interest in metropolitan spaces and their relation to social organization. In contrast to Manila, where congestion is the rule and dominant planning efforts are towards creating vertically stratified tiers of traffic — overpasses and light rail transits, for example — Kyoto appears to have managed to retain a human scale. On a bike I can move through streets with relative ease as well as with some duration of attention. I move by at a speed that allows me to watch short episodes in people's outdoor lives — a father playing ball with his son, a woman watering her garden, construction workers enjoying a joke and a smoke on their break. And taking the same routes, I become familiar with the little routines I witness. It makes me feel as if I were really getting to know the social life around me — the "human" aspect of the city, which seems everywhere to be destroyed by the inhuman machinations of state bureaucracies and corporate capital. But what is this "human" aspect I think I recognize?

It seems to me that it is this compelled bracketing of what we take as natural and transparent that defines the experience of foreignness. It is not just a matter of finding oneself in an unfamiliar place. Foreignness is the very defamiliarization of one's means of understanding — the realization of one's social, not to mention, literal, illiteracy. It is, moreover, the very effort to overcome these limits of one's self which are reflected in the opacity of one's surroundings. If we view foreignness as this challenge of acquiring social fluency, then we can see that this is an everyday subjective process that has great significance for that reorganization of the world widely-referred to as "globalization." In the last two decades there has been an exponential increase of "foreigners" in all parts of the world. All these foreigners move through new spaces as a way of gaining fluency in the social logic of such spaces. It is their daily renegotiation of who they are in order to understand or be accommodated within their new social environment that makes possible those processes and structures of globalization we so easily and completely attribute to big institutional agents like governments, banks, and corporations.

(Visiting Research Fellow)

INSIDE APEC: A VIEW FROM AN OUTSIDER

By Medhi Krongkaew

Most of us today have heard about APEC, although not many know what it is or how it works. So through this short article, I would like to say something about APEC from the point of an outsider who happens to be deeply involved in the APEC process at the moment.

I was appointed Chair of the Economic and Technical Cooperation Subcommittee of APEC by the APEC ministers in Auckland 1999 for a 2-year term starting January 2000. Normally this job is for a diplomat or bureaucrat from an APEC member economy. How could an outsider academic like me get in? The answer was a combination of an experiment by my government, Thailand, to introduce an outsider to work inside the APEC process, and the broadmindedness of APEC senior officials and ministers who were willing to try this experiment. It has given me a marvelous opportunity to peer inside the working mechanisms of APEC.

APEC was set up in 1989 as a loose organisation in support of free and open trade and investment in the Asia Pacific region. This orientation was the first and foremost guiding principle for its advent and existence. But equally important is the principle of voluntary commitment. What this means is that members will not be forced to accept any agreements or commitments against their will.

This makes APEC different from WTO in the sense that WTO is a rule-based organisation in which an agreement, once accepted, is binding to all members. In APEC, by contrast, some members may open up for free trade and investment unilaterally first, with other members to follow when they are ready. Within a stipulated time horizon, that is 2010 for developed members and 2020 for developing members, APEC members should be able to trade and invest freely with one another. In this sense, APEC complements WTO and sets a moral standard, if not a practical example, for others to follow.

To remain forward-looking in a loose organisation like this is not an easy matter. That is why soon after APEC came into being, it set up working mechanisms or procedures that have become more or less institutionalised. Each year one member will take its turn to host the annual summit of APEC leaders, the occasion of the highest level of decision making in APEC. Below that is the meeting of APEC ministers, which also takes place once a year, just before the summit, so that what the leaders decide to do has already been agreed upon by their responsible ministers. Little seen by the general public, however, are the meetings of senior APEC officials that prepare the agreements for their ministers and subsequently their leaders. These senior officials meet up to four times a year at regular intervals and go through all the motions of promoting free trade and investment in the region. It is in these senior official meetings that I have been deeply involved.

From the beginning, a major task of senior APEC officials has been to find ways to promote trade and investment liberalisation and facilitation, or TILF. A Committee on Trade and Investment (CTI) was set up to help senior officials manage these TILF agendas, which include such activities as the announcement of individual action plans on reduction of tariffs and non-tariff barriers, and collective action plans on such facilitation matters as standards and conformance, customs procedures, mutual recognition agreements, dispute settlement procedures, and so on. In 1995, as a result of the APEC Summit in Osaka, another major activity within APEC was established. This is economic and technical cooperation, or ECOTECH, which has since become the "third pillar" of APEC (after trade and investment liberalisation and facilitation). In 1997, the ECOTECH Subcommittee, or ESC, was set up to help senior officials manage their ECOTECH agendas. (The reason this new organisation is a subcommittee rather than a committee like CTI is pure politics: some members were afraid that, by giving greater attention to ECOTECH, the focus on TILF might be blurred. So, a compromise was reached that this new group is to be set up as a subcommittee working directly under senior officials. In practice, however, the status of ESC is very much the same as CTI).

The work program for my ESC this year includes the revision of Part 2 of the Osaka Action Agenda (which sets activities for various working groups within APEC to undertake to enhance economic and technical cooperation), the drafting of strategies for human capacity building, preparation for the possible launch of the first ECOTECH individual action plan, and so on. The ways in which APEC officials perceive and respond to these APEC tasks have made a good impression on an outsider like me. They take APEC seriously and are willing to go through the difficult preparation for eventual freer trade and investment in the region, while at the same time promoting economic and technical cooperation among members so that all can reach the goals of 2010 and 2020 faster. It is this feeling that makes my participation in the APEC process very refreshing and rewarding indeed.

(Visiting Research Fellow)

MY EXPERIENCE IN JAPAN: A DEWDROP IN AN OCEAN

By Abdul Halim

June 1979 marked my first visit to Japan: two days at Tokyo Agricultural University on my way to Bangladesh from the United States. My arrival was unknowingly delayed by one day because of crossing the international dateline. The university was worried and tried to locate me. They rang the Bangladesh Embassy in Tokyo and also the USDA in Washington, which the university knew had sponsored my US visit. Soon after my arrival in Tokyo, an official from the University visited me in the hotel. I saw a great sign of relief and happiness on his face and in his mind. This kindness of feeling and seriousness of the Japanese as hosts was a most important and sweet memory for me. Academic visits, a reception, and souvenirs of the university made my visit more pleasant. One souvenir, a tie clip with the university icon, I have been using for the last 22 years. One teacher showed me an agricultural farm a little distance from the campus. On the way I asked him about his job satisfaction. He had full job satisfaction, he said, but he did not know why he worked so hard that he had no time to relax and enjoy social and family life. I asked him why. His reply was that he was already used to it and couldn't do what he felt. He expressed his belief that *"life in Japan is too mechanical."* I left Japan with a hope to visit again.

August 1983 was my second visit to Japan: one week at Kyoto University. I presented a seminar paper on Rice and Civilization in Bangladesh, sponsored by UNESCO. It was a useful and well organized international seminar. Prof. Watabe of CSEAS and Prof. Shigeru Ikuta of the Center for East Asian Cultural Studies, Tokyo University, are among those whom I still remember. My third visit was in

August 1984 and it was Prof. Shigeru Ikuta who hosted my visit for five days on my return to Bangladesh from Canada. One of the staff of that center, Ms. Yasuko Shidara, who is still working there, met me in Kyoto recently with some of their useful publications, when she came to visit the library of CSEAS. In October 1989, I made my fourth visit to Japan, along with a senior colleague, Prof. Ashraf Ali Khan. This six-week visit was sponsored by JICA with the supervision of Prof. Yoshihiro Kaida. Professor Kaida and Dr. K. Ando of CSEAS made our visit effective and useful. We were impressed with the efficient management of our study visit. My honorable senior colleague, Prof. Khan, who later became the vice chancellor of the Bangladesh Agricultural University, died in 1993, while holding that position. I remember him very much from this visit to Japan. We traveled together for six weeks in Tokyo, Kyoto, Hiroshima, and Okinawa. I have memories of all those visits.

My fifth visit was in December 1996 for two weeks at Kyushu University with JICA assistance, when I was Rector of the Institute of Post Graduate Studies in Agriculture in Bangladesh. At the end of that visit, the young man who took me to airport asked what I liked and disliked about Japan. He disclosed that the Japanese were investigating why other nationals do not like to stay in Japan as residents. My reply to him was that I disliked the *communication gap* between visitors and Japanese. It is difficult to learn, share experiences, and understand the meanings of events and situations through interpreters. My liking was for the *hospitality* of the people. It also seemed that most people in Japan are *"workaholic,"* punctual, polite, tolerant, and respectful of elders. Perhaps my experience of Japan may be the experience of a blind man seeing an elephant.

(Visiting Research Fellow)

SEARCHING ON OPAC

By Kannikar Linpisal

OPAC stands for Online Public Access Catalog. It has currently become a very common word for library users since high technology has come into libraries. Library users are able to see or browse library resources in their own libraries and other libraries all over the world through OPAC. The presentation of various formats of OPAC in each system attracts library users just as window displays attract the public into department stores.

There are two methods of information searching, querying and browsing. Querying uses key words which are sometimes exactly matched to the content. Another way of querying is to use comparison words as Boolean logic. In this kind of the querying the users will get "everything" or "nothing." In general, library users query for information they already know exists in the library. In browsing, users sweep subject indexes, call numbers, and bibliographic data. This kind of searching is appropriate for users who do not have a specific purpose or a specific resource to look for. In general, libraries provide both kinds of searching for users.

The methods of browsing are roughly divided into two formats, systematic browsing and non-systematic browsing. In non-systematic browsing, users generally look for books or articles to read for their own recreation, for no specific purpose. Systematic browsing, however, is also a good way to derive unexpected information. It has an additional purpose: when researchers don't know exactly what information is sought, their search often fails. They then turn to the technique of sweeping the book shelves. We sometimes call this kind of searching "semi-direct" or "semi-structured." In fact, searchers have their own logic for searching and retrieving. This encourages them to keep on browsing which finally leads to success.

Failed Searches Using OPAC

Searching for books, journal articles, or documents is an important activity which library users should not skip. The success of library searching depends on cooperation between information providers and information consumers. Good cooperation will help information consumers to get adequate information quickly. In addition, they will derive more accurate information.

Failed OPAC searches are usually due to the searchers' own performance. Most OPAC searchers do not understand how databases are structured. They do not know the correct method of searching or retrieval. Another reason for failure is incomplete information. Some databases are not completely collected, and there is no standard of cataloguing or indexing.

How to Cope with a Failed Search

Information providers need to assist information consumers to appropriately access the library catalog. First and foremost, it is necessary to provide searchers with instruction. There are many ways to do this. The library might provide a special talk on the system, including a demonstration of OPAC searching. Some libraries give pamphlets or short manuals to users or put short manuals beside each OPAC terminal. This is very simple to do. Library staff standing by to assist searchers promptly when they need help are also available in some libraries. According to research on the Development of OPAC Instruction by Neilson and Baker, it was obvious that library users who were given instruction were able to search OPAC more effectively than those who never received instruction.

(Visiting Research Fellow)

石井米雄先生文化功労者顕彰をお祝いする会

旧あかね会（旧すらなり会）の主催で、2001年1月25日京都ホテルに石井先生ご夫妻を招いて「石井米雄先生の文化功労者顕彰をお祝いする会」が開かれた。初めに、立本成文センター所長より、「このたびの栄誉は、石井先生の輝かしい研究業績がもたらしたものであることは言うまでもないが、東南アジア研究がようやく世に認知されるようになった証でもあり誠に喜ばしい」との挨拶があった。つづいて、市村真一元所長と石毛直道国立民族学博物館館長から祝辞があり、これを受けて石井先生がお礼の言葉を述べられた。そのあと渡部忠世元所長の発声で乾杯、関係の研究者のみならず、センター創設当時から現在にいたるまでの事務官、非常勤職員など約90名が、和やかな雰囲気のうちに歓談した。石井先生は参加者一人ひとりと親しく話され、センターで苦労をともにされた方々との再会を楽しまれた。

渡部元所長の発声で乾杯される石井先生ご夫妻

送別会場で同僚と記念写真（中央が前田さん）

教務掛主任前田満喜子さん定年退職

1998年の大学院アジア・アフリカ地域研究研究科発足と同時に、工学部から東南アジア研究センター等事務室教務掛主任として着任され、3年間研究科の教務事務の基礎づくりに尽力された前田満喜子さんが3月末日をもって定年退職された。前田さんは、1959（昭和34）年に京都大学理学部に就職、その後工学部に配置換になり、情報工学科及び電気工学科事務主任、工学部教務課第二教務掛主任を歴任された。研究科発足以前も含めてセンター等事務室で定年を迎えられるのは、前田さんが初めてである。

前田さんのこれまでのご苦労を労い、今後益々のご活躍を願って2001年3月19日、センター東棟2階の教室で送別会が開催された。田中二郎 AA 研究科長の挨拶のあと、立本成文センター所長の発声で乾杯、研究科・センターの教職員のみならず院生が多数参加して、仕事熱心で親切な前田さんに感謝し、別れを惜しんだ。宴たけなわとなった頃、前田さんは就職してからの42年を振り返って話をされた。ご自身の経歴に絡めて事務内容の劇的な変化を感慨深げに語られたのが印象的であった。

センター人の動き

五十嵐忠孝（8月19日〜9月1日）インドネシア「インドネシア在来暦法資料収集」▽吉原久仁夫（8月19日〜9月7日）中華人民共和国「中国工業化の進捗状況調査」▽林行夫（8月20日〜9月14日）タイ、ラオス「国境地域における実践宗教調査」▽吉村充則（8月28日〜9月23日）マレーシア「林冠構造の広域把握のための植生放射分光多点計測」▽濱下武志（8月23日〜9月5日）カナダ「アジア・北アフリカ国際会議出席」▽P. Abinales（8月27日〜9月16日）フィリピン「ヘゲモニーについての現地調査」▽石川登（8月27日〜9月27日）香港、マレーシア「労働移動に関する文献収集・臨地調査」▽安藤和雄（8月28日〜9月25日）バングラデシュ「住民参加型農村開発行政支援計画に関する共同研究」▽松林公蔵（9月3日〜10月8日）インドネシア「イリアンジャヤ州における神経難病の実態調査」▽藤田幸一（9月10日〜26日）インド、バングラデシュ「管井戸灌漑の効率性及び灌漑普及に伴う社会経済変化実態調査」▽河野泰之（9月11日〜23日）タイ「タイ東北部における農村生業史資料収集」▽白石隆（9月17日〜24日）オランダ「インドネシアーナショナリズム関係の講演」▽濱下武志（9月19日〜22日）韓国「ソウル大学旧植民地関係資料検討会議」▽立本成文（9月21日〜25日）中華人民共和国「東南アジア研究の現状と展望に関する国際会議」▽濱下武志（9月27日〜30日）同「中国・東南アジア円卓会議」▽C. Hau（10月1日〜8日）同「フィリピンにおけるアメリカ支配資料収集」▽田中耕司（10月11日〜27日）ラオス「ラオス経済政策支援調査」▽濱下武志（10月12日〜20日）香港「香港企業の華南・東南アジアに誇る企業支店ネットワーク調査」▽白石隆（10月15日〜20日）チェコ「フォーラム2000会議」▽白波瀬昌廣（10月20日〜26日）タイ「拠点大学交流セミナー事務打合せ」▽濱下武志（10月25日〜27日）台湾「台湾史研究会議」▽河野泰之（10月29日〜11月7日）タイ、ラオス「水稲生産力に関する国際ワークショップ」▽濱下武志（10月31日〜11月29日）タイ他「タイにおける潮州ネットワーク調査」▽柳澤雅之（11月1日〜9日）USA「東南アジア作付体系資料収集」▽山田勇（11月6日〜19日）中華人民共和国「湖北省林木育種計画にかかる遺伝資源調査」▽安藤和雄（11月8日〜12月23日）ラオス、バングラデシュ他「共同研究ネットワーク構築」▽林行夫（11月8日〜2001年2月3日）タイ「タイ仏教と地域間関係の動態調査」▽阿部茂行（11月16日〜20日）シンガポール「アジアと日・米・欧の経済・文化・政治リンクの総合的研究」▽立本成文（11月19日〜28日）マレーシア、インドネシア他「地域研究推進の連絡調整」▽白石隆（11月20日〜30日）ラオス、カンボジア他「ラオス、カンボジアおける援助事業視察」▽松林公蔵（11月23日〜26日）韓国「ソウル郊外洪川地区在住高齢者の健康度に関する継続追跡調査」▽P. Abinales（11月20日〜29日）フィリピン「地域研究推進にかかる研究連絡会議」▽西渕光昭（11月26日〜12月2日）ベトナム「腸管感染症原因菌の動態調査」▽海田能宏（12月1日〜23日）タイ、カンボジア「メコン流域開発計画への地域研究的アプローチ」▽田中耕司（12月3日〜26日）タイ「東南アジア農業作付ネットワーク構築」▽河野泰之（12月4日〜23日）タイ他「生業、環境研究ネットワークの推進」▽柳澤雅之（12月5日〜20日）ベトナム「北部ベトナム山地部農業調査」▽藤田幸一（12月11日〜2001年12月10日）ミャンマー「ミャンマーの農業生産向上に資する政策助言」▽T. A. Rambo（2001年1月2日〜29日）ベトナム、タイ「調査、学会」▽河野泰之・柳澤雅之（1月5日〜13日）ミャンマー「農業開発・農業発展に関する現地調査」▽西渕光昭（1月12日〜16日）フィリピン「第6回汎太平洋新興感染症国際会議」▽速水洋子（1月15日〜2月14日）タイ、ミャンマー「山地民社会の移動・民 ↗

連絡事務所だより

バンコク

石仏の破壊とタイ仏教徒

林　行夫

1,400余年にわたって立ち続けていた二体の石仏が瓦礫と化した。悲鳴にも似た世界からの人類文化遺産保護の声は、アフガニスタンのイスラム原理主義者タリバーンには届かずバーミヤン大石仏はわれわれの視界から姿を消した。

その「予告」以来、先進国の知識人や文化人がこぞって非難声明を寄せたが、仏教徒が国民の9割を占めるタイ国でも「遺憾の意」がサンガ（僧団）や官界の人々によって表明された。タイ人はこの事態をどうみるのか。このような「暴挙」は許すべきではないというのが、メディアのおおかたのステートメントであったが、報道が興味本位的なものになり始めた矢先、暗い空洞をみせた写真がタイ字紙、英字紙の一面を飾った。驚きであった。

ところが、連絡事務所に出入りするＣ大学大学院歴史学科のＣ君から、後日思わぬ言葉を聞いた。Ｃ君は仏教徒だ。彼は友人とこのことを話題にしていたとき、タリバーンがいう「石仏はただの石」という見解には、皆首肯できたという。形あるものは、いずれ滅すると教えたのは仏陀だったではないかと。バーミヤン仏は確かに石である。仏教に帰依する人々はそれを聖仏として崇拝対象にする。仏教徒だけではない。アフガニスタン外の知識人や芸術家、そして美術商までが文化財として捉えている。

化学変化のようにうまれたふたつの定義には、それぞれ異なる背景があるが、同じ過程を共有している。石仏を指さしてこれはただの石ですよ、と教え諭すことができたのは、その石が刻んでいた仏陀自身だったかもしれない。仏陀は虚構のなかに住処を求める人間の本性を脱することを試みた聖者であるが、その意味でも今回の「事件」は、過激な物象化批判（偶像破壊の徹底）とも読めるし、昨今の「文化資本」主義にたいする抵抗でもある。

石にこびりついた妄想を剥ぎおとすには歴史を逆行するほかに手だてはない。つまりは破壊である。そして、石にかえることで喪失されるバーミヤン仏を目撃することが、もしかしたら、タリバーンの政治的意図とはまったく別に、そのような社会や文化の認識を相対化して、地（仏陀の形姿ではなく仏陀という存在そのもの）にたち帰れというメッセージともなる。

破壊された壁画は先進技術をもって復元可能といわれるが、タイのメディアは、その後何もなかったようにこの話題をとりあげない。まだ出家していないという若いタイ人の捉える無常（anicha）観に、タイ仏教徒の所在をみた思いがする。　（センター助教授）

ジャカルタ

水野　広祐

3月28日のワヒド大統領による、2月1日の国会が大統領に発した覚書に対する回答は、大統領弾劾にむけた動きを沈静化するには十分ではなかった。大統領は元首、副大統領は政府首班へと機能を分離する案など、種々の事態打開策が模索されているものの、妥協点が見出せない。このままでは、8月ないしその前の臨時国民協議会の開催と大統領の解任もありうる。政治の混乱は、ルピア価値の一層の低下に結びつき、他方、治安の悪化は、経済の屋台骨である石油天然ガス生産を脅かすまでに至っている。

まるで混乱の真っ只中にあるかのようなインドネシアだが、大多数の国民は冷静であり、日常生活はむしろ平穏と言える。3月13日の大統領批判派イスラームグループによるゼネスト呼び掛けの日、大統領官邸前に集まった1万人余りの自派学生らは、とりまく群衆もいない閑散としたデモしか行えなかった。これにつづく大統領支持派のデモも、農村のイスラーム宗教学校生徒主体の国民的広がりを欠いたものであった。大統領が毎日のように行う問題発言はどうかと思いながらも、大統領批判派イスラームグループの言葉に乗ってメガワティ大統領を実現させたとしても、3日後には、彼らが「女性が大統領だから国政が混乱している」と攻撃の矛先をメガワティに向け始めるだろうと疑っている。

大臣は大統領が任命する大統領の補佐役でしかなく、政党が内閣に大臣を出していることは与党形成を意味しない。大統領選の時に票を投じた国民協議会議員の大半（選出大統領の出身母体政党以外）は、政策協定なく支持したいわば勝手連であり、連立政権の一翼を担っているわけではない。そして、最大議席をもつ闘争民主党も99年選挙で33％の得票率をもったに過ぎなかったし、将来にわたっても強制がなければ過半数の議席をもつ政党は生まれがたい。これではいつでも合従連衡で野党が国会や国民協議会の過半数を制す事態がうまれうる。大統領制とはいえ、事実上の責任演説を毎年国民協議会に対して行わねばならない現制度のもとでは、政治はむしろ恒常的に不安定にならざるをえない。

こうしたなかの問題解決策とは、大統領を弾劾すべきか否かという当面の方策ではなく、大統領直接選挙制への移行を含む政治制度の改革である。また民主政治が安定するまでの間の対策は、政治が混乱していても経済が発展しうる政府非依存体質の強化である。2000年の経済成長率4.7％、今年の成長率予測4％という数字は、この方向にすすんでいることを裏付けていると見ることができる。日々の政争への国民のさめた対応は、こうした事情からもうまれているのである。　（センター助教授）

↘ 族間関係、ジェンダーの調査」▽C. Hau（1月20日〜3月11日）フィリピン「フィリピンにおけるアメリカ支配資料収集」▽西渕光昭（1月22日〜2月2日）タイ「腸管感染症原因菌の動態調査」▽吉村充則（1月24日〜2月26日）マレーシア「熱帯林の林冠構造・植生放射分光計測」▽濱下武志（2月4日〜6日）香港「国際経済史セミナー」▽吉原久仁夫（2月5日〜14日）台湾、フィリピン「経済発展に関する資料収集」▽阿部茂行（2月6日〜21日）タイ、シンガポール「国家・市場・社会・地域統合のロジックとアジア経済に関する資料収集」▽五十嵐忠孝（2月7日〜24日）インドネシア「在来暦法に関する現地調査」▽T. A. Rambo（2月8日〜19日）ベトナム「ワークショップ・発表」▽山田勇（2月9日〜3月8日）ベトナム「ベトナム中部の生態資源ネットワークに関する現地調査」

2001年５月１日発行
発　行　〒606－8501
京都市左京区吉田下阿達町46
京都大学東南アジア研究センター
Tel　（075）753－7344
Fax　（075）753－7356
e-mail: editorial@cseas.kyoto-u.ac.jp
編　集　石川　登・米沢真理子